

〔研究ノート〕 二十巻本『搜神記』の成書に関する一考察

著者	大橋 賢一
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	66
ページ	106-117
発行年	2008-06-28
URL	http://doi.org/10.15068/00150647

二十卷本『搜神記』の成書に関する一考察

大橋賢一

はじめに

二十卷本『搜神記』巻一五にみえる「河間郡男女」は、次のような話である（原文は本稿末「表二」参照）。

晉の武帝の世、河間郡に男女の私に悦び、相配適せんことを許すもの有り。尋いで男軍に従い、積年歸らず。女の家更めて之を適がしめんと欲す。女行くことを願わず。父母之に逼る。已むを得ずして去く。尋いで病みて死す。其の男成りより還る。女の在る所を問う。其の家具に之を説く。乃ち冢に至り、之を哭して哀を敘べんと欲すれども、其の情に勝えず、遂に冢を發き、棺を開くに、女即ち蘇活す。因りて負いて家に還る。將養すること数日、平復すること初めの如し。後に夫の聞き、乃ち往きて之を求む。其の人還さずして曰く、「卿が婦已に死す。天下豈に死人の復た活くべきを

聞かんや。此れ天の我に賜う、卿が婦に非ざるなり」と。是に於いて相訟う。郡縣決すること能わず。以て廷尉に讞る。秘書郎王導奏す。「精誠の至りを以て、天地を感ぜしむ。故に死して更に生く。此れ常の事に非ず。常禮を以て之を斷するを得ず。請う冢を開く者に還さん」と。朝廷其の議に従う。

唐、積道成『法苑珠林』巻九二、北宋、李昉『太平御覽』卷八八七、同『太平広記』卷三七五には、『搜神記』からの引用として、この話が引かれている。また、『広記』巻一六一には、『珠林』からの引用として、この話が引かれている。一方、南朝、沈約『宋書』、及び初唐、房玄齡『晋書』、それぞれの五行志には、この話と酷似したものが載っている。なお、八卷本『搜神記』にはみえない。

ところで、『宋志』『晋志』に「秘書郎王導」とあるのに対し、『珠林』『御覽』『広記』にはない。かかる諸本の異

同を踏まえ、李劍国『新輯搜神記 新輯搜神後記』（中華書局、二〇〇七年、以下『新輯』と略称）は、この記述が元来なかった、という。そこで本稿では、王導の名が元来記されていたのか否か、ということから検討してみたい。

なお、『搜神記』の底本としては、明の毛晋輯津逮秘書所収二十卷本を用いた（以下、津逮本と略称）。津逮本は、明の姚士粦と胡震亨の手からなる秘冊彙函所収の『搜神記』を元にしたものである。表題については、津逮本にないため、津逮本を襲う清、張海鵬輯学津討原本によった。

一 テキストの異同について

「河間郡男女」について、『珠林』『御覽』『広記』及び、『宋志』『晋志』を見比べると、『御覽』『広記』巻一六一の記述は、『珠林』とほぼ一致し、『晋志』は『宋志』とほぼ一致する。ただ、『広記』巻三七五は、いずれのものとも一致しない。つまり、『河間郡男女』は、『珠林』系統、『広記』巻三七五系統、『宋志』系統の三種のテキストが存在する、といえる。そこで、この三本を用い、比較検討していく。

小南一郎「干宝『搜神記』の編纂（下）」（『東方学報』七〇冊、一九九八年）は、『搜神記』の成立について、姚

士粦と胡震亨の二人が、秘冊彙函を編む際に、類書などを用いて『搜神記』の復元作業が行われたのであろうと想像している（二〇八頁）。また、明人が類書などの引用文を集めて『搜神記』を復元する際、何か元になる古い『搜神記』のテキストがあつて、それを基礎にしつつ、関連がありそうな部分に、佚文を付加していったのだろうか、という疑問を提示した上で、最終的には二十卷本全体の構成や、話の配列順序なども明人の手になったであろうと結論づけている（同前、一一〇～一一一頁）。この推定が正しいとすれば、ある話が二十卷本に収載される場合、干宝に時代がより近い類書を襲うはずである。「河間郡男女」で言えば、『搜神記』として引用されるものの中では、『珠林』に引かれているものが、最も古い。従つて、明人が再編集する際には、『珠林』所引の『搜神記』を土台とするはずだろう。確かに、津逮本と『珠林』を比べると、「秘書郎王導」は、『宋志』などによつて付加されたかにみえる。が、四者を仔細に比較すると、「河間郡男女」は必ずしも『珠林』を元にしつつ、『広記』巻三七五と『宋志』を用いて再編されたのではないように思われる。以下、本論末の【表一】を参照しつつ、四者の関係を検討する。

まず、『宋志』と、津逮本との異なる点を押さえておく。

細かい点では、『晉惠帝』という時代、『梁國』という場所の違いのほか、『宋志』では、男が從軍した場所が「長安」と明記されているという違いがある。また、話の筋の違いとしては、「已受礼娉」とあつて、從軍する前に男が女と略式ながら結婚していたことになっており、從軍した男は「夫」と、後から結婚した男は「婿」と記されている。このことは、李劍国氏の「思うに『宋志』のこの記述は、別に拠る所があり、元來本書に拠つたものではない（『宋志』所記此事当別有所拠、非本書）」（『新輯』三五八頁）という指摘が、妥当であることを裏付ける。以上を踏まえ、テキストの系統をまとめると、次のようになるう。

I 『搜神記』によるテキスト

i 『珠林』↓『御覽』↓『広記』卷一六一

ii 『広記』卷三七五

II 出典不明のテキスト

『宋志』↓『晉志』

仮に明人が再編集した際、『珠林』を元にしていたとしよう。すると、津逮本には、元の文が書き換えられた例の他に、省略された例、付け加えられた例がみえてくる。以下、煩を厭わず、各例と改作された根拠の有無について列記する。列記するにあたり、まず津逮本の記述を、次に

『珠林』の記述を示す。また、改作が認められる場合は、その根拠に対する筆者の考えを示す。

(一) 書き換え

- ① 河間郡有男女私悅↑河間郡有男女相悅（根拠不明。）
- ② 尋而男從軍↑既而男從軍（根拠Ⅱ『宋志』「尋而其夫」。）
- ③ 女家更欲適之↑父母以女別適人（根拠Ⅱ『宋志』「女家更以適人」。「欲」「之」の根拠不明。）
- ④ 尋病死↑無幾而憂死（根拠Ⅱ『広記』「尋病死」。）
- ⑤ 其男戍還↑男還悲痛（根拠Ⅱ『広記』「其夫戍還」。「男」の根拠不明。）
- ⑥ 女即蘇活↑即時蘇活（根拠Ⅱ『広記』「女即蘇活」。）
- ⑦ 後夫聞其夫（根拠Ⅱ『広記』「後夫聞」。）
- ⑧ 秘書郎王導奏上↑廷尉奏上（根拠Ⅱ『宋志』「秘書郎王導議曰」。「議」「曰」は不襲。）
- ⑨ 此非常事、不得以常禮斷之↑在常理之外、非禮之所處、刑之所裁（根拠Ⅱ『宋志』「此是非常事、不得以常理斷之」。「是」は不襲。「理」の根拠不明。）
- ⑩ 請選開冢者↑斷之還開冢者（根拠Ⅱ『広記』「請選開棺者」。「棺」は不襲。）
- (2) 省略
- ⑪ 乃至冢↑乃至冢所（根拠Ⅱ『広記』「乃至冢」。）

⑫ 欲哭之敘哀而不勝其情↑始始欲哭之敘哀而已不勝其情
〔根拠Ⅱ『広記』『欲哭之敘哀而不勝其情。』〕

(3) 付け足し(いずれも『珠林』に記載なし。)

⑬ 女不願行、父母逼之、不得已而去。(根拠Ⅱ『広記』『女不願行、父母逼之、』宋志』『不得已而去。』)

⑭ 問女所在、其家具說之。(根拠Ⅱ『広記』『宋志』『問女所在、其家具說之。』)

⑮ 女即蘇活。(根拠Ⅱ『広記』『女即蘇活。』)

⑯ 平復如初。(根拠不明。)

⑰ 朝廷從其議。(根拠Ⅱ『宋志』『朝廷從其議。』)

なお、上記以外に、「于」と「於」、「冢」と「塚」という字形の違いがあることを付言しておく。

上記のうち、①③⑤⑨⑫の例については、現存するテキストと比較検討しても、基づく所が判然としない。各項目について改めて考えてみよう。①については、諸本で「相」に作るのを、津逮本は「私」に作るが、強いて言えば二字の字形が似ていることから、伝写の誤りといえるかもしれない。③については、諸本で「以」「人」となっているのを、津逮本は「欲」「之」に作る。これらに関しては、伝写の誤りと考えられず、津逮本だけが、このように作る理由が判然としない。⑤について『広記』が「夫」に作る

のに対し、津逮本が「男」に改めているのは、話の筋からして、従軍した男を「夫」と呼ぶのには齟齬が生じるからだろう。『広記』が「夫」に作るのは、話の筋が異なる『宋志』の記述が反映されたからかもしれない。⑨については、諸本で「理」に作るのを、津逮本は「禮」に作るが、この理由も判然としない。『珠林』の「非禮之所處」と何らかの関係があるのかもしれない。⑯の「如初」は、津逮本にしかない。この二字が無くても話の筋は通じるが、津逮本にだけ記されている理由は不明と言わざるを得ない。

二 李剣国論とその検討

李剣国氏は、二十巻本『搜神記』(Ⅱ津逮本)の問題について、十四項目に分類し、その責を『搜神記』を再編した姚士舜と胡震亨に負わせている。先に検討した例については、(八)他のテキストによって妄りに佚文原文を改める(拠他書妄改佚文原文、(十)意のまま字を増やす(随意增益文字)の二項が該当する(『新輯』八六―一〇〇頁)。李剣国氏は、(十)に当たる例として、現行本『搜神記』卷一六「蘇娥」の「然寿為惡首」を挙げ、「首」の字が諸本にないこと、龔寿一人だけが人を殺したのだから、「惡首」とは言えない、従って妄りに字が付け加えられたのだ

と判断している。また、同巻「秦巨伯」の「鬼動作不得」を挙げ、「鬼」字が『広記』巻三一七には無いから、後世付け加えられたのだと判断している。先に挙げた⑩の例は、李劍国氏の基準からすると(十)に該当し、その理由は「秦巨伯」と質を同じくするだろうが、結局は書き添えられた必然性が明らかにならない。(八)に関しては、「河間郡男女」を引き、「王導」の改作を例に挙げ、現行本には『宋志』『晋志』により、誤って改変された個所が多いと指摘する。本篇「河間郡男女」注六に記された氏の考証をまとめると、王導の生卒年は三三九―二七六年で(『晋書』王導伝による)、武帝在世時に秘書郎にはなっていない。『晋書』劉寔伝と惠帝紀によると、王導が秘書郎となつたのは、惠帝の永康前後に間違いない。『宋志』の記述に齟齬はないが、二十巻本が『宋志』『晋志』によって「廷尉」を「秘書郎王導」に書き換えるのは甚だしい誤りだ、と結論づけている(『新輯』三三八頁)。

史書を踏まえた氏の考証は、妥当性があるように思われるかもしれない。が、先の諸本の系統分析を踏まえると、全ての問題を解決するとは言えない。「河間郡男女」に限って言えば、仮に明人が諸本から再編集したのだとすれば、津逮本は、『珠林』を元にしたという可能性があるとしても、

かなり複雑な改作を経たことになるばかりでなく、「如初」など説明がつかない付け加えが残ってしまう。

李劍国氏は、津逮本の成立を、

↘ 『珠林』系統

祖本 ↓ 『広記』巻三七五系統 ↓ 津逮本

別本 ↓ 『宋志』

とみなしているようだが、以上の分析結果を踏まえると、

↘ 現存しないテキスト ↓ 津逮本

祖本 ↓ 『珠林』系統

✓ 『広記』巻三七五系統

別本 ↓ 『宋志』

という過程があったと考えるのも、不自然ではなくなるのではなからうか。諸本の分析を踏まえると、このように考えることが、最も自然なように思われる。次に、こうした考え方の妥当性をはかるために、「河間郡男女」以外の諸本の関係について検討してみたい。

三 『珠林』『広記』及び『宋志』『晋志』所収話の検討

汪紹楹『搜神記』(中華書局、一九七九年)により、『珠林』『広記』及び『宋志』『晋志』に同様の話が引かれているものを調べると、全部で十二条みつか(一)る。各性質を分類

すると、次のようになる（作品番号は汪本による）。

(1) ほぼ『珠林』を踏襲するもの

二七〇・二八・二六・二六・三〇・三五・三七（七条）

(2) 『珠林』と別なテキストをつぎ足したもの

二八四（一条）

(3) 『珠林』の記述が二条に分割されているもの

二八四・二五（二条）

(4) 諸書のテキストを任意に複数用いているもの

二二三・三〇・四七（三条）

(1) は、津逮本の記述が、『珠林』所引の話とほぼ一致する例である。一七〇「燕巢生鷹」について言えば、津逮本には、「未央宮中」及び「今興起宮室、而鵲來巢」という『珠林』にない記述があるが、前者は『晋志』から、後者は『宋志』から補われたとみなすことができる。

(2) について。一八四「兩足虎」は、前半が『珠林』から、後半が『晋志』から引用されている例である。なお、『珠林』には後半部分に該当する記載がない。前半の記述は『珠林』と完全に一致している。一方、『晋志』による後半部分には、一見して『晋志』から引用されていると判断できるが、「河間王顥獲以獻」を欠くという大きな違いがある。また、津逮本は『晋志』の「丙辰」を「景辰」に、「兵乱」

を「兵革」に作る。また、「于」を「於」に作る。後半の類話は、『宋志』にも載るが、これらの記述を改められる記載はなく、「河間郡男女」同様、書き換えの根拠がみつからない。

(3) について。先に触れたように一八四は、『珠林』の話が、津逮本では二条にわかれていたが、同じく一五「一身二体」に該当する『珠林』の話は、一五と二三の二条に分割されている（表二参照）。一五は、「有」字を脱していること、また「晉惠懷之世」が『晋志』同様「惠帝之世」に、「亦能兩幸」が『宋志』『晋志』同様「亦能兩用人道」になっているという違いはあるが、基本的には『珠林』によっている。一方、分割された三は、本文が複雑に入り組んでいる。この話は、前半は陰部が腹にある女について、後半は陰部が首にある女について、各々その住居と性質が述べられているが、『珠林』では、前半の女だけが取りあげられ、その住居と性質は後半の女の話になっている。『宋志』では、前半部が更に分割されており、共に末尾に京房『易妖』を引く。津逮本は、両方の女の話載せる『晋志』とほぼ一致するが、『晋志』で「渡在揚州」「性亦淫」となっているのを、『珠林』同様、「居在揚州」「亦性好淫」に作る。ただ、「亦性好淫」に関しては、津逮本は「姪」を「淫」に作り、

かつ『珠林』にある「色」字を脱している。また、京房『易妖』の引用は、『晋志』ではなく、『珠林』と完全に一致する。

(4) について。先の三のほか、三〇二及び三〇七があるが、順を追って検討する。三〇三は、惠帝元康年間、瑤氏が地中から犬を掘り起こした部分、太興年間、太守張懋が犬を見つけた部分、『尸子』ほか二書の引用部分という三段からなる（表三三 参照）。全体として『珠林』を襲っているようだが、仔細にみると『珠林』と異なる部分がいくつかある。このうち、一段目はほぼ『珠林』及び『広記』と一致するが、「視聲發處」「穴」は、いずれにも載っていない。また、津逮本は「覺有物」に作るが、『珠林』では「覺如物」に、『広記』では「覺如有物」に作り、津逮本に一致するものはない。二段目の冒頭は、津逮本は『珠林』と異なり、むしろ『晋志』の記述に一致する。ただ、完全に一致してはおらず、冒頭の「至」は、いずれにも載らない。また『晋志』「見有二天子」の「見」字を脱し、津逮本が「牀」を「床」に作るという違いもある。三段目に一致するものは『珠林』しかないが、完全には一致しておらず、「賈」字が加わっていること、「萬畢」を「畢萬」に、「氣化」を「氣化」に、「惑」を「成」に作るという違いがある。「作」

と「化」、「惑」と「成」については伝写の誤りの可能性があるが、一方「賈」が加わる根拠は不明である。また、『淮南萬畢』は、漢の劉安『淮南萬畢術』一卷を指すだろうか（『隋志』子部、五行類に載る）、津逮本は書名を誤ったまま載せていることになる。仮に『珠林』に基づいていたとすれば、このような誤りが生じるはずがないだろう。⁽²⁾

三〇七「王周南」は、鼠が王周南に死を予言する話である（表四 参照）。津逮本は、『珠林』に拠っているようだが、部分的に『広記』（出典は『幽明錄』）や『宋志』によって補われているところがある。ただ、その中に津逮本にしかない記述がある。「須臾復出」は、『珠林』は「斯須復出」に、『宋志』は「斯須更出」に作る。なお、『広記』には該当個所の記述がない。また「爾不應死」については、『珠林』『広記』『宋志』いずれも、「汝不應」に作る。末尾は、津逮本は『広記』にほぼ拠っているのだが、奇妙なのは最後に「一字」の二字が付されていることである。この語句は諸本にないばかりか、津逮本を襲う学津討原本にもなく、汪氏の校記にも指摘はない。なお、津逮本が「即失衣冠所在。就視之、與常鼠無異一字」となっているのに対し、『珠林』は「即失衣冠。周南便卒、取視、俱如常鼠」となっており、結末では王周南も鼠と俱に死んでいる。⁽³⁾

まとめ

前節の(4)の検討から、津逮本にしかみることでできない記述が確かめられた。仮に津逮本が『珠林』などに基づき、『搜神記』が再構築されているのだとすれば、これらの記述は、明人が書き換えたり、付け加えたり、削ったりしたことになる。この仮説が正しいならば、明人は意味のない改作を多数していることになる。当然、改作するには、何らかの意図が働くはずである。が、これまでみてきたように、書き換えについては、伝写の誤りとみなし得るものもあつたが、付け加えや、省略と思われるものは、大きな意味をなさないものばかりであつた。とすれば、意図的に明人が書き換えたと考えるよりも、津逮本は、現在見られぬテキストに準じていた、と考えるのが自然ではなからうか。無論、それは『搜神記』全体に互るものではなかつたろう。が、部分的ながらも現存しない『搜神記』の記述を用いていたことを、これらの記述は表していると思う。

二十卷本『搜神記』の改作が、全て明人の手からなり、原書に近いのは『珠林』所収のものだという、李劍国氏の見解は、改めて検討されなくてはならない課題なのである。

注

(1) 汪本は学津討原本を底本とする。また、『搜神記』として引用されているものは「本條見某々」と、類話が引用されているものは「本事見某々」と記し分けている。『宋志』『晋志』では、『搜神記』から引用したと明示されていないので、いずれも後者のように記されている。

(2) この話は『晋中興書』『吳郡志』『至正崑山志』『玉峯志』『天中記』『琅邪代醉篇』に引用されているが、どれも津逮本の記述を裏付けるものはない。

(3) この話は『搜神記』の引用として、『北堂書鈔』卷一五八、『御覽』卷八八五・九九一、『藝文類聚』卷九五にのり、また『太平寰宇記』卷二には『列異伝』の引用としてのっているが、いずれにも、津逮本が拠つたとみなし得る記述はない。

(北海道教育大学旭川校)

【掲載表の凡例】

● Ⅱ 津速秘書本だけにある部分。

● Ⅲ 重傍線Ⅱ津速秘書本の文字と異なる部分。

【表一】三六〇「河間郡男女」

《津速秘書本卷一五》	《法苑珠林》卷九二	《太平広記》卷三七五	《宋志》
<p>晉武帝世、河間郡有男女相悦、許相配適。尋而男從軍、積年不歸。女家更欲適之。女不願行。父母逼之、不得已而去。尋病死。其男戍還。問女所在。其家具說之。乃至冢。欲哭之敘哀、而不勝其情。遂發冢、開棺、女即蘇活。因負還家、將養數日。平復如初。後夫聞、乃往求之。其人不還曰「卿婦已死。天下豈聞死人可復活耶。此天賜我。非卿婦也。」於是相訟。郡縣不能決。以讞廷尉。秘書郎王導奏以「精誠之至、感于天地、故死而更生。此非常事、不得以常禮斷之。請還開冢者。」朝廷從其議。</p>	<p>晉武帝世、河間郡有男女相悦、許相配適。既而男從軍積年。父母以女別適人。無幾而憂死。男還悲痛。乃至塚所。始欲哭之、敘哀而已。不勝其情。遂發塚、開棺、即時蘇活。因負還家、將養數日。平復。其夫、乃往求之。其人不還曰「卿婦已死。天下豈聞死人可復活耶。此天賜我。非卿婦也。」於是相訟。郡縣不能決。以讞廷尉。廷尉奏以「精誠之至、感於天地、故死而更生。在常理之外、非禮之所處、刑之所裁。斷以還開塚者。」</p>	<p>晉武帝時、河間有男女相悦、許相配適。而男從軍、積年不歸。女家更以適人。女不願行。父母逼之、而去。尋病死。其夫戍還。問女所在。其家具說之。乃至冢。欲哭之敘哀、而不勝其情。遂發冢、開棺、女即蘇活。因負還家、將養平復。後夫聞、乃詣官爭之。郡縣不能決。以讞廷尉。奏以「精誠之至、感於天地、故死而更生。是非常事、不得以常理斷。請還開棺者。」</p>	<p>晉惠帝世、梁國女子許嫁、已受禮娉、尋而其夫戍長安。經年不歸。女家更以適人。女不樂行。其父母逼強、不得已而去。尋得病亡。後其夫還。問女所在。其家具說之。其夫徑至女墓、不勝哀情、便發冢、開棺、女遂活。因與俱歸。後嬖聞之、詣官爭之、所在不能決。秘書郎王導議曰「此是非常事、不得以常理斷之、宜還前夫。」朝廷從其議。</p>

【表二】一九五「一身二體」・221「太興初女子」

<p>〔津逮秘書本卷七〕</p>	<p>〔法苑珠林〕卷四三</p>	<p>〔宋志〕同卷二条・前後同</p>	<p>〔晉志〕同卷二条・前後同</p>
<p>惠帝之世、京洛有人、一身而男女二體、亦能兩用人道。而性尤好淫。天下兵亂、由男女氣亂而妖形作也。（一九五）</p>	<p>晉惠懷之世、京洛有人、一身而有男女二體、亦能兩幸、而尤好娼。天下兵亂、由男女氣亂而妖形作也。</p>	<p>晉惠懷之世、京洛有兼男女體、亦能兩用人道。而性尤淫。案此亂氣之所生也。自咸寧、太康之後、男寵大興、甚於女色、士大夫莫不尚之、天下皆相放效、或有至夫婦離絕、怨曠妬忌者。故男女氣亂而妖形作也。元帝太興初、又有女子陰在腹上、在揚州、性亦淫。京房『易妖』曰「人生子。陰在首、天下大亂、在腹、天下有事、在背、天下無後。」</p>	<p>惠帝之世、京洛有人、兼男女體、亦能兩用人道。而性尤淫。此亂氣所生。自咸寧、太康之後、男寵大興、甚於女色、士大夫莫不尚之、天下相倣效、或至夫婦離絕、多生怨曠、故男女之氣亂而妖形作也。</p>
<p>太興初、有女子、其陰在腹、當臍下。自中國來至江東。其性淫而不產。又有女子、陰在首、居在揚州。亦性好淫。京房『易妖』曰「人生子。陰在首、則天下大亂。若在腹、則天下有事。若在背、則天下無後。」（二二一）</p>	<p>當中興之間、又有女子、其陰在腹肚、居在揚州、亦性好娼。故京房『易妖』曰「人生子。陰在首、則天下大亂。若在腹、則天下有事。若在背、則天下無後。」</p>	<p>元帝太興初、有女子、其陰在腹、當臍下。自中國來至江東。其性淫而不產。又有女子陰在首、適在揚州、性亦淫。京房『易妖』曰「人生子。陰在首、天下大亂、在腹、天下有事、在背、天下無後。」于時王敦據上流、將欲爲亂、是其徵。</p>	

【表三】三〇二「地中大聲」

<p>【津逮秘書本卷一二】</p>	<p>晉惠帝元康中，吳郡婁縣懷瑤家，忽聞地中有犬聲，隱隱。視聲發處，上有小竅，大如蟻穴。瑤以杖刺之，入數尺，覺有物。乃掘視之，得犬，雌雄各一，目猶未開，形大於常犬。哺之而食。左右咸往觀焉。長老或云：「此名犀犬，得之者，令家富昌。宜當養之。」以目未開，還置竅中，覆以磨礪，宿昔發視，左右無孔，遂失所在。瑤家積年無他禍福。</p> <p>劉宋太興中，吳郡太守張懋，聞齋內牀下犬聲，求而不得。既而地圻，有二犬子。取而養之，皆死。其後懋為吳興兵沈充所殺。『尸子』曰：「地中有犬，名曰地狼。有人名曰無傷。」『夏鼎志』曰：「掘地而得豚，名曰賈。掘地而得豚，名曰邪。掘地而得人名曰聚。聚，無傷也。」此物之自然，無謂鬼神而怪之。然則賈與地狼，名異其實一物也。」</p> <p>『淮南畢漢』曰：「千歲羊肝，化為地宰。蟾蜍得莢，卒時為鶉。」此皆因氣化以相感而成也。</p>
<p>【法苑珠林】卷一二</p>	<p>晉元康中，吳郡婁縣懷瑤家，忽聞地中有犬子聲，隱隱。其聲上有小竅，大如蟻。瑤以杖刺之，入數尺，覺如物。乃掘視之，得犬，雌雄各一，目猶未開，形大於常犬也。哺之而食。左右咸往觀焉。長老或云：「此名犀犬，得之者，令家富昌。宜當養之。」以目未開，還置竅中，覆以磨礪，宿昔發視，左右無孔，遂失所在。瑤家積年無他禍福也。</p> <p>大興中，吳郡府舍中又得二枚物如初。其後太守張茂為吳興兵所殺。『尸子』曰：「地中有犬，名曰地狼。有人名曰無傷。」『夏鼎志』曰：「掘地而得狗，名曰賈。掘地而得豚，名曰邪。掘地而得人名曰聚。聚，無傷也。」此物之自然，無謂鬼神而怪之。然則與地狼，名異其實一物也。」</p> <p>『淮南畢漢』曰：「千歲羊肝，化為地宰。蟾蜍得莢，卒時為鶉。」此皆因氣化以相感而惑也。</p>
<p>【太平記】卷三五九 / 【晉志】</p>	<p>晉元康中，吳郡婁縣懷瑤家，聞地中有犬聲，隱隱。其聲上有小竅，大如蟻。懷以杖刺之，入數尺，覺如有物。及掘視之，得犬，雌雄各一，目猶未開，形大於常犬也。哺之而食。左右咸往觀焉。長老或云：「此名犀犬，得之者，令家富昌。宜當養之。」以目為未開，還置竅中，覆以磨礪，宿昔發視，左右無孔，遂失所在。瑤家積年無他禍福也。</p> <p>（廣記）</p> <p>元帝太興中，吳郡太守張懋，聞齋內牀下犬聲，求而不得。既而地自圻，見有二犬子。取而養之，皆死。尋而懋為沈充所害。京房『易傳』曰：「讒臣在側，則犬生妖。」</p> <p>（中略）</p> <p>案『尸子』曰：「地中有犬，名曰地狼。」『夏鼎志』曰：「掘地得犬，名曰賈。」此蓋自然之物，不應出而出，為犬禍也。（晉志）</p>
<p>【宋志】</p>	<p>晉惠帝元康中，吳郡婁縣民家，聞地中有犬聲，掘視得雌雄各一。還置窟中，覆以磨礪，宿昔失所在。</p> <p>元帝太興中，吳郡府舍又得二枚物如此。其後太守張茂為吳興兵所殺。案『夏鼎志』曰：「掘地得狗，名曰賈。」『尸子』曰：「地中有犬，名曰地狼。」同實而異名也。</p>

【表四】四三七【王周南】

〔津逮秘書本卷一八〕	〔法苑珠林〕卷四二	〔太平廣記〕卷四四〇	〔宋志〕
<p>魏齊王芳正始中、中山王周南爲襄邑長。忽有鼠從穴出、在廳事上、語曰「王周南、爾以某月某日當死。」周南急往、不應。鼠還穴。後至期復出、更冠幘皂衣而語曰「周南、爾日中當死。」亦不應。鼠復入穴。須臾復出、出復入、轉行數語如前。日適中、鼠復曰「周南、爾不應死、我復何道。」言訖、顛蹶而死。即失衣冠所在。就視之、與常鼠無異「字」。</p>	<p>中山王周南、正始中爲襄邑長。有鼠從穴出、在廳事上、語曰「周南、爾以某月某日當死。」周南急往、不應。鼠還穴。後至期復出、更冠幘皂衣而語曰「周南、汝日中當死。」周南復不應。鼠復入穴、斯須復出、出復入、轉行數語如前。日適中、鼠復曰「周南、汝不應、我復何道。」言訖、顛蹶而死。即失衣冠。周南便卒。取視、俱如常鼠。</p>	<p>魏齊王芳時、中山有王周南者爲襄邑長。忽有鼠從穴出、語曰「周南、爾以某日死。」周南不應。至期、更冠幘皂衣而出曰「周南、爾以日中死。」亦不應。鼠復入穴。日適中、鼠又冠幘而出曰「周南、汝不應、我何道。」言絕。顛蹶而死。即失衣冠所在。就視之、與常鼠無異。（出『幽明錄』）</p>	<p>魏齊王正始中、中山王周南爲襄邑長。有鼠從穴出、語曰「王周南、爾以某日死。」南不應。鼠還穴。後至期、更冠幘皂衣出、語曰「周南、汝日中當死。」又不應。鼠復入、斯須更出、語如向日。適欲日中、鼠入復出、出復入、轉更數語如前。日適中、鼠曰「周南、汝不應、我復何道。」言絕。顛蹶而死。即失衣冠。取視、俱如常鼠。案班固說此黃祥也。是時曹爽秉政、競爲比周、故鼠作變也。</p>